

人称代名詞における複数を表す接尾辞「ら」「たち」の使い分けについて

－「彼たち」はなぜ言えないのか－

藤本珠笛（埼玉大学教養学部日本文化専攻）

人称代名詞において複数を表す接尾辞「ら」「たち」はどちらも使用できるものが複数存在する。一方で、「彼」「彼女」といった対応する人称代名詞において「彼たち」は用いにくいといった複雑な部分があり、これらの使い分けは日本語学習者にとって難しい点である。したがって、本発表ではコーパス（BCCWJ）を用いて比較・分析を行い、日本語学習者への指導について提案した。調査の結果、「ら」は三人称代名詞「彼」との共起が多く、排他性や客観性、謙譲表現などの特徴がみられた。一方、「たち」は一人称代名詞「私」との共起が多く、同質性や親しみ表現などが特徴として挙げられた。これらのことから、「ら」「たち」の使い分けにおいて話者と指示対象における心的距離との関連性を提示した。また、「彼たち」を用いにくい理由として、人称代名詞「彼」が指示代名詞から転用されたものであることを挙げた。

一人称・二人称における接尾辞「がる」の指導ポイントについて

尾藤真裕（埼玉大学教養学部日本文化専攻）

日本語の感情・感覚形容詞には主語が三人称の場合、形容詞の語幹に接尾辞「がる」をつけなければならないという人称制限がある。日本語教育では、三人称と接尾辞「がる」の共起を中心に扱っているが、実際には一人称・二人称と接尾辞「がる」との共起も考えられ、従来の研究ではその使用実態が明らかにされたとは言い難い。本発表では、コーパスを用いて一人称・二人称と接尾辞「がる」が共起する用例を収集して、前接形容詞、後続形式、使用場面を分類することによって特徴を分析した。その結果、①「可愛がる」は個別に扱う②一人称で意志表出文では「がる」を使用しない③二人称・助言の使用場面において動詞用法として文型で提示することを指導ポイントとして提案した。

「～たて(の)」と「～たばかり(の)」に関する一考察

川亦和也（埼玉大学教養学部日本文化専攻）

本研究は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』を用いて「生まれたての子ども」、「生まれたばかりの子ども」などの類義語「～たて(の)」と「～たばかり(の)」の実例を分析し、その特徴を記述することを目的とする。結果として、作成動詞＋食品に関する用例は「たて(の)」の使用が好まれる傾向にあり、結びつくことのできる動詞の種類は「～たばかり(の)」の方が多いということが明らかとなった。また、先行研究の内省による記述がコーパス上でも現れるかということを検証した。

明清白話小説と江戸時代における中日の漢語語彙の受容

－「端的」を例にして－

令狐菁菁（北京師範大学外国言語文学学院）

中国の明清時代には白話小説が大量に江戸時代に伝わり、白話語彙も当時の日本語に持ち込んだ。本研究は江戸時代の中日漢語語彙交流史に着目し、明清白話小説『水滸伝』を主な材料とし、『漢語大辞典』と『日本国語大辞典』を参考資料として、白話小説によく使われる語彙「端的(duandi)」を選択し、日本語における受容と変遷、および現代日本語「端的」に与える影響を考察する。

本研究は中国語の「端的(duandi)」の歴史上の出典と意味を考察し、また、日本語の「端的」の語源をたどり、「端的」は中世の時に「端的(duandi)」から継承したことがわかる。江戸時代に入ると、明清の白話小説が大量に渡り、特に1639年に『水滸伝』が日本に伝わって江戸文壇や庶民層に影響力が広くて、前後半世紀余りの「水滸ブーム」を形成した。「端的(duandi)」はその中の常用語彙としても日本の庶民文学に受容され、日本語の「端的」として定着した。例えば1689年井原西鶴の作品『本朝桜陰比事』の中にすでに「端的」の用例があった。一方、江戸時代には「端的」が中国語の「端的(duandi)」の意味を受容した上に、新しい意味を発展させて現代日本語に受け継がれたことがわかる。

「機会」と「チャンス」について —なぜ「感染のチャンス」とは言えないのか—

後藤隆幸（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

本稿では、類義語である「チャンス」と「機会」について現代の使用頻度や文脈における差異を検討した。用例収集にはコーパス（BCCWJ）を用い、書き言葉と話し言葉、イメージの正負、置き換えの可否、複合名詞の頻度と共起する語の四点について両名詞を比較した。

その結果、書き言葉では「機会」、話し言葉では「チャンス」が多く用いられる傾向にあったほか、負のイメージで用いられる頻度は「機会」の方でやや多く、置き換えられる割合は「チャンス」よりも「機会」が多かった。また複合名詞の用例の頻度はあまり差がなかったものの、共起する語は「機会」はビジネス・金融関連の漢語が多かったのに対して「チャンス」は様々なジャンルの語があったほか、「チャンス」の程度や属性を表す外来語と結びつきやすいことが明らかとなった。この結果になった要因として外来語と漢語の差異の他に「チャンス」の方がより「限られた」場面での使用が多いことが考えられた。

「ている/たことがある/た/ていた」の相違について

劉李昂（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

中国語で経験を表す言い方は「过(過)」の一種類しかないが、「过」は日本語で表すには「ている」「たことがある」「た」と三つの表現があり、また中国人学習者に「过」を使う時に大体「たことがある」を使ってしまうと先行研究で指摘している。しかし、「たことがある」はすべての経験を表す場合に使えるわけではない。本稿は中国人学習者の運用能力向上を目的に、「ている / たことがある / た / ていた」と四つの表現の意味機能を認知言語学で統一的説明を試みた。

その結果、「ている」と「たことがある」はスキーマが同様だが、「ている」は出来事時から発話時への経路が焦点化されている一方、「たことがある」は発話時から出来事時への経路に主眼が置かれていること、そして「た」は経験に関係なく過去に発生した出来事のみ注目しているが、「ていた」は「ている」の上に基準時があり、出来事時からその基準時に向かう経路が焦点化されていること、が「ている / たことがある / た / ていた」の差異を生じさせていると考えた。